

全国の舞台で、快走



保芦 摩比呂（学校法人石川高等学校3年）

12月21日(日)から行われた全国高校駅伝大会で学校法人石川高等学校(福島)が見事日本一に輝きました。

その、学法石川の選手として、町内出身の保芦摩比呂選手が6区での快走を見せ、日本一に貢献しました。

小・中学校時代からすでに注目選手に

保芦選手は、小さいころから走ることが好きな選手で、県内ののみならず、県外のレースにも自ら出るほどだったそうです。

その実力は確かなもので、令和元年に開催された東日本都道府県小学生陸上競技交流大会の1500mで3位入賞。さらに令和4年の全日本中学校陸上競技選手権大会の1500mでは、4分3秒39で4位に入賞するなど輝かしい成績を納めています。

さらなる高みを目指し、県外の強豪校へ

高校進学では、県内に残ることも考えたのですが、全国トッププレーヤーの力をを持つ選手たちと切磋琢磨する道を選び、親元を離れて寮生活をしながら、陸上生活に打ち込んでいました。



チームの仲間とともに全国の舞台へ

ケガの影響は、復帰にあまり影響がなかったと話しますが、様々な想いを抱え、レースに臨んだそうです。レースでは、松田監督が「追いつかれてても6区で勝負できるように」と送り出された保芦選手は区間2位の快走を見せるなど、素晴らしい走りを見せてくれました。

家族とチームに支えられた成長

ご両親は、保芦選手の小さい頃から、本人の意思を尊重し、県外のレース巡りを行い、スポーツ少年団に所属していた際には、指導者資格の取得を行なうなど献身的にサポートしてくれていました。保芦選手は、「高

ケガと向き合った苦難の時期

輝かしい活躍の裏で、高校生活はケガに悩まされた時期もありました。1年生の頃は、走行距離の増加や環境の変化から体調を崩すこともあります。2年生の頃も度重なるケガに苦しんだといいます。

そして迎えた高校最後の年。右足首の疲労骨折により、夏の全国高校総体への出場が叶いませんでした。そんな悔しさを胸に抱いて臨んだのが、今大会でした。

自身の性格とチームの絆

大会を終えて改めて自身の性格を振り返り、「負けず嫌いであること」や「自分のペースで走るレース展開が合っていること」を再確認したといいます。それと同時に、駅伝という競技を通じて「チームの仲間を信じて走ることの強さ」を改めて実感したそうです。



次の目標は「大学3大駅伝」

次の目標について尋ねると、大学に進学し、1年生から3大駅伝を走りたいと胸の内を話してくださいました。一步一歩、挑み続ける保芦選手の進化から今後も目が離せません。この度は、大変おめでとうございます。